

1.9. ウィーン便り (9)—— 国際原子力機関 (IAEA) に勤めて：オーストリア山事情 (2002.8) ——

本誌二五四号に特集「山」があった。多くの人がそれぞれの山でそれぞれの感動を味わっているのを読んで強く共感した。私もウィーンでの私的な時間のかなりをハイキングと山で過ごした。日頃は国連ハイキングクラブの仲間と週末に出掛ける近郊の山々が多いが、夏にはやはりアルプスに惹かれる。



オーストリア最高峰のグロスグロックナー (3798 ㍎)、スイス最高峰モンテローザ (主峰 4634 ㍎) 登頂時の感動は別項 (趣味生活編) で触れた。これらを含め私の登頂した 4000 ㍎峰は六座 (モンテローザの五座とイタリアのグランパラディーツ) である¹。それぞれについて書く余裕はないが、雪と時には氷の世界がこんなに美しいとは夏の日本では味わえなかった感覚である。ゴールデンウィークに登った快晴の穂高が似ているか。西ヨーロッパアルプス最高峰フランスのモンブラン (4807 ㍎) が残っていた。「どうしてそんなに危険な山へ行くの」と親しい友人が気遣ってくれたが、「最後の高い雪山」の覚悟でやはり帰国前に登りたいと思っていた。この稿の校正直前、六月末にその目標を達成することができた。日本に帰れば雪の 4000 ㍎峰には年齢的にももう行けないかも知れないが、ものすごく嬉しく心に残る思い出であり、臉に残る美しさである。

オーストリア国土全体は北海道ほどの広さ、その約三分の二が東アルプスに属する山岳地帯である。国土の七割以上は森と草に被われている。一年間に国民の二倍に達するという外人観光客のうち、この自然を訪ねる人ももちろん多い。国として大事な産業だが、ふんぷんとした商業主義は感じられないのが良い。訪れる人を自然も人間も静かに待っていて、訪れた人が好きなように時を過ごせるように、良い意味で「放っておく」環境が嬉しい。

よく歩く国民である。週末のハイキングでは老人から子供幼児まで非常に広い年齢層に出会う。結構高い山でも、時に出掛ける平日でも多くのハイカーに出会う。耳のちぎれそうな冬の日にも行き会う。私が日本で歩いた頃は若年層、それもいかにも「山や」然としたのが多かった。最近「中高年登山」も盛んになってきたが、オーストリアには及ばない。美しい山国だからと言えば当然かも知れないが、これだけ盛んなのはそれだけの理由があるだろう。まず、誰もが安心して歩けるように道や標識がしっかりしている。コース沿いに適当な間隔で飲食のできる静かで安い店がある。こういったインフラが整備されているから、誰でも歩ける。歩く側には歩くマナーがある。これらについて自分の肌で感じたことを書きたい。

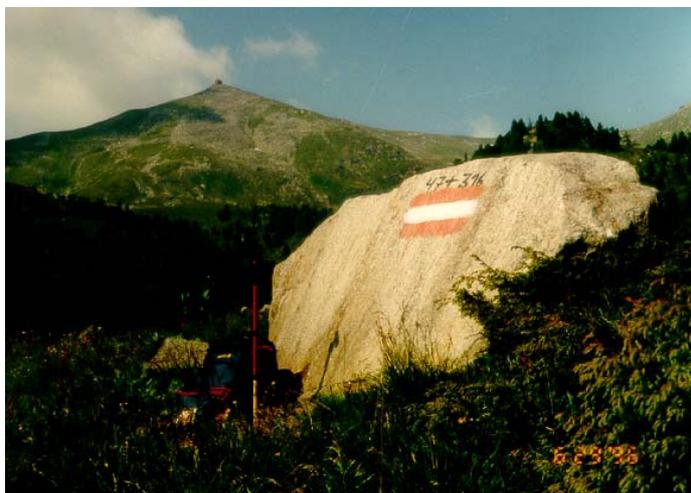


・道

居住地のすぐ近くから始まる。つまりアクセスが容易である。最大都市のウィーンでさえそうだから、国内どこもそうである。遠隔地へ列車で行っても駅からすぐ緑に囲まれた道が始まる。森や牧草地を横切

¹ この他にタンザニアのキリマンジャロ 5895 ㍎とメルー4566 ㍎が加わる。

る道が多い。牧草地では放し飼いの牛や馬によく出会う。少し森に入ると野生のカモシカの群れに会うこともある。コース標識で多いのは赤白赤の横縞模様で、国旗に酷似しているが歴史は古い。国旗は第一次大戦後の共和国成立時だが、ハイキングコースの標識は十九世紀中にできていたようだ。赤の他に青、黄、



緑などもある。この色に合わせてガイドマップがコースを表示しているのが分かり易い。岩、木などの自然物を利用していることが多い。通常は標識に添えて数字が書いてある。二桁は道路（コース）番号、三桁になると地域の情報が加わる。この数字を辿っていけば目的地に着けるようになっている。「国道」に相当する全国規模のコースは十本ある。東海道自然歩道と考えれば良い。最も長いのは01号で国の東端に近いウィーンの森から西はスイスとの国境の街、ブレゲンツの森までの

1300 kmを東西に横切っている。高い山からの眺望は素晴らしいが、誰もが下から登れる訳ではない。そこであちこちにケーブルカー（ザイルバーン）がある。多くの方はそれで登ってから、下り中心で楽しんでいる。冬のスキーリフトも夏にはハイカー用となって人を運んでいる。

・道具

こちらに来て最初に靴を買った。ゴアテックス製である。山靴は三十年前に買った皮製を持っているが、日常のハイキングには重過ぎる（重量ではなく機能的な意味で）ので新しく購入した。このゴアテックスはその頃日本では雨具などの衣類には使われていたが、靴を眼にしたのは初めてだった。軽くて持ちが良い。「キャラバン」と愛称していた布製より遥かに上等である。日本用に二足目も買った。アノラックやズボン、リュックザックなどの用具も結局新調する結果になり、道具類はほぼ全部置き換わった。重宝しているのは杖。伸縮式のスキーストックと思えば良い。日本では使わなかったが、最近使っている。こちらでは若い人も使っている。特に下山時に膝への負担を軽くするのに効果的である。ヒュッテンシュラーフザックと言うのがある。これも日本では見かけなかった。小屋泊りに際してシーツ代わりにする布製の簡易寝袋である。これは便利である。軽いし、清潔感を持てるのが良い。山友達への土産になると思っている。吸い口用チューブの付いた水筒も便利である。いちいちリュックを下ろさずに歩きながら水が摂れる。ガーストハウスや山小屋があって安いから、実はコンロ、コッヘルの働く機会がなく眠っている。大いに使うだろうからと着任して早めを買って裏目に出た。帰国後に活躍してもらおう。最近の必需品と言えば携帯電話か。もちろん緊急連絡用で不要であるべきだが、これで救われた事例を何度も聞いた。なお、雨具は必携品。防寒具も真夏の一時期以外はリュックに入れておきたい。日本以上に「山の天気は分らない」である。例えば、九月半ば 1500 ㍎で 20 ㍎の雪、八月半ば 2000 ㍎で雹に会っている。

・「四季」

ウィーン近郊の山では三月末、冬時間が終ると「春」が始まる。ハイカーが急に増える。新緑である。「真夏」は短い。七、八月だけと思って良い。が、日照が長いから行動範囲が広がる。澄んだ空気と陽光の下の山小屋テラスで、心地よく疲れた身体に入れるビールやワインが何とも言えない。夏時間最後のヶ月が「秋」と言える。天候も安定して快適な季節である。オーストリアの山の秋も悪くない。黄葉が主

だが「全山一斉」と言えるほど葉が色を変える山もある。ななかまのような真っ赤な葉は少ないが、時に会おうと日光、箱根等を思い出す。「冬」の高い山は無理でも、くるぶし程度の乾いた積雪を小気味良く踏み歩くのは楽しい。スキーも含めてこの国の人は冬にマイナスのイメージを持っていない。夏に劣らず山を歩く人は多いし、幼児子供も雪の中で楽しそうに遊んでいる。雪を待ち望む気風すら感ずる。トニーザイラーやヘルマンマイヤーを産むのもうなずける。オリンピックやワールドカップで「小国」オーストリアが華々しく活躍するのも不思議ではない。

・地図とガイドブック

私は「国立測量院」とでもいう公式機関で出している五万分の一地図を原則利用している。やや縮尺が大きい感じで、独り歩きなどで正確を要する場合はさらに詳細な地図を補助的に使う。例えばよく出掛ける「ウィーンの森」や「ウィーン南郊三山²」地区のガイドマップである。このガイドマップには実際のコース標識の色に合わせた表示があって助かる。もちろん山小屋の位置も示してある。計画段階ではローター社発行のA6版大のガイドブックを愛用している。簡易ルートマップとスタート地点、コースタイム、適期と見所、途中の小屋の位置などが簡単にまとまっている。ドイツ語で読むにはこの程度が適当である。あとは地図とコンパスを頼りに歩く。ちょっと困ったのは小屋の電話番号が意外に調べにくいことである。日帰りなら心配は少ないが、泊まる場合は予約したい。少なくとも営業していることを事前に確認したい。このガイドブックにはそこまで書いてない。ヒュッテ情報のある別の本が必要になる。最近ではインターネットで情報が取れるようになったので助かる。

・山小屋

コースに沿って適当な間隔で飲食のできる店がある。多くは眺望の良い場所に建っていて食事が楽しい。立派な大きな建物が多い。ガーストハウスと言って結構ちゃんとした食事を出してくれる。値段の手ごろなのが助かる。飲み物も街中とほとんど変わらない。資材は少々の高さなら車であげる。資材用ケーブルを持つ場合もある。少し奥に入ると山小屋になる。さすがにガーストハウスほどの快適さは望めない。が、周りに広がる緑一杯の牧草地、山並み、朝焼け夕焼けが補ってくれる。夏の夜、蛍にも会った。



ここも安い。一泊二食で3000円前後。山岳協会の会員は多くの小屋で割り引きがある。寝所は雑魚寝、鳩小屋形式など概ね日本と同じである。日本と異なるのは男女の区別が殆どないことか。鳩小屋は仕切り用カーテンもなく同室である。オーストリアで最も高位置にある小屋はグロスグロックナー肩にある3454mのヨハン大公小屋。ベッドもビールもあって結構快適だった。ただし、「日本人なら」と勧められた地元メニューの米料理はビールなしでは喉を通らなかった。気圧の低い高地での料理法になっていなかった。

² 私の命名である。シュネーベルク、ラックス、シュネーアルペの三つ。ヨーロッパアルプス東端に位置する2000m級の最後の山々である。

山中のガーストハウスも山小屋も無休ではない。月曜とか火曜が閉店であることが多い。オフシーズンは長期に閉じる店も多い。ただし、多くの山小屋は冬でも登山者のため、一室は無錠で開けてある。嬉しいことに飲み物（例えばビール、コーラ）も置いてある。「良識」との交換である。

・歩く側のマナー

「自然を大事に」の感覚が身に付いている。最近はそのエベレストも「ゴミの山」と耳にするが、この国でそれを見たことはない。ごく自然にゴミを持ち帰っている³。日本ではまだゴミを見ることが多い。日本でもかつての尾瀬の実例が示すようにゴミをなくすことは出来るのである。山を楽しみたい人は山を大事にして欲しいと心から思う。

ハイキングコースの道は時に私有地を通る。牧草地であったり、農道や敷地内の庭の一部だったりする。ハイカーの便宜に開放してくれているのだ。ハイカーは決められたコースを外れないことがそれに対する返礼である。皆よく守る。手にする杖で道端の草木をなぎ倒したり、花を摘んだりする人もいない。「見



て、撮って」楽しんでいる。携帯ラジオの音を振りまく人ももちろんいない。道で行き交うハイカーは必ず挨拶する。私もする。これは日本でも一般的風景で、海やレジャー施設では見かけない私の好きな情景である。

冬季などオフシーズンに無人小屋を利用する場合、ゴミを残さず清潔に使うのはもちろんだが室内に雪を持ち込まない注意も払う。融雪による湿気、夜間の凍結を嫌うからである。皆、当然のように実施し、新人を指導している。これが文化であり、伝統なのだ。

・山岳協会

創立は 1862 年でドイツより早い。当然全国組織であり、スイスやフランス、イタリア等他国の組織との連携も深く利用価値が高い。これら他国のヒュッテにも割引が効くところが多い。国内では各地に支部がある。私はウィーンにある支部の一つに加入した。年会費は約 4000 円で遭難保険がついている。

各支部では年間を通してツアーや岩登り訓練コース、海外登山などの活動をしている。簡単なプログラムなら会報の案内を見て電話で申し込む。少し大きな計画では事前に装備や事前準備の説明がある。私は夏の高い山とか、それに備えた冬の雪山歩きのプログラムに主に参加する。この冬の雪山歩きが予想以上に面白い。乾いた雪を踏みしめて歩くと、「サクッサクッ」と快適な音がする。雪道を歩く楽しみを知った感じがする。これらの行事へは枠に余裕があれば非会員も参加でき、その参加料は会員と同額である。例えば日帰りの近場で 500 円と安い。岩登りが入ると多少高くなる。一人で雪の上を歩きたくなると、深い山に入るのは不安なのでスキー場にでかける。スキーヤーの邪魔にならぬようゲレンデの脇を登り降りする。クロスカンントリー用のコース沿いなら平坦で楽だ。

³ 何も捨てないかと言うと実はそうでもない。果物の皮とか種などは割合簡単に林の中に投げ入れる。「自然に帰るものはいい」と言うことらしい。ガラス瓶やプラスチック等の人工物は決して捨てない。「自然がご呼び」の場合も気楽に樹間に姿を消す。

・ガイド

日常のハイキングにはもちろんなくても済むが、居た方が助かる。国連ハイキングクラブのガイドは地元のボランティアが多い。山岳協会では日常のハイキングから本格的な山登り、海外登山、トレッキングなど多彩なプランを作っている。が、グループツアーなので私などは体力的に躊躇する場所がある。顔ぶれが中高年主体でも恐ろしく体力がある。それに休憩が少ないのだ。原則二時間は休まない。だからグロスグロックナーなど本格的な山の場合、多少費用はかかるが私は地元の専門ガイドを頼む。



(モンテローザのイタリア側をザイルで下山)

山の難度に依ってガイド一人が引率できる客数が異なる。グロスグロックナー (3798 ㍎) では四人まで、モンテローザのドゥフルシュピツェ (4634 ㍎)、モンブラン (4807 ㍎) は二人までだった。なお、マッターホルン (4477 ㍎) はガイド一人と客一人である。難しさが想像できる。これらガイドの山小屋宿泊料は客負担である。「英語のできるガイド」が多くて助かる。

・用語

山の用語にはドイツ語が多い。ヤッケ、スパッツ、アイゼン、ピッケル、カラビナ、ザイル、ヒュッテ、ビバーク等々。これらはごく普通の山言葉だが、その英語はあまり知られていないのではないか。ドイツ語だが、ドイツ産ではなく、オーストリア産が多いのではないかと推察している（詳しく調査した訳ではない）。スポーツあるいはレジャーとしての山歩きの歴史もオーストリアが古い。私のドイツ語語彙も好きな山が幸いして増えた。

・ヨーロッパ山事情

オーストリア以外ではスイス、イタリア、フランスを少し歩いた程度なので多くは語れない。そこから垣間見る限り、事情は概ね共通している。道の整備、コース標識等は横通しされていてかなり共通のルールである。山小屋は各国間で概ね山岳協会会員への割引特典がある。ただ国によって宿泊環境は当然異なる。手元の「アルプス 4000 ㍎峰」という写真本によると六十一座の 4000 ㍎峰があるという。高さだけなら登山電車やケーブルカーで頂上近くまで行けるところも少なくない。ユングフラウヨッホやエギュディミディに登れば 4000 ㍎峰が目の前である。氷河も間近である。マッターホルンも直近までケーブルカーが使えて、スキー客が夏でも粉雪を蹴散らしている。もちろん森林限界の遙か上になる。そこから先、足で頂上に到達しようとする、ガイドの助けが必要となる。幾つかの山に登る機会しかなかったがそれでも好運だったと感謝している。